

# 「信大茂菅ふるさと農場」10年目の「人づくり」戦略 —「信大茂菅農業義塾」の開設—

土井 進

## 【要旨】

「信大茂菅ふるさと農場」は、平成6年度（1994年度）に始まった「信大 YOU 遊サタデー」のイベント的性格を打破し、学生が通年にわたって継続的に子どもたちとふれあうことを目的として、平成12年度（2000年度）に開拓された。この農場の第一義的な目的は、学生が子どもたちと一緒に農作業を体験することによって、子どもとのコミュニケーション力、企画力、人間力などの教師に求められる実践的指導力の基礎を養成することであった。教員養成の視点から発足した「信大茂菅ふるさと農場」であるが、地域社会の中でJA ながの、長野市茂菅地区農家と連携しながら9年間の実践を積み重ねてくることによって、農場での活動は学生が子どもとかかわる体験学習の場であることに止まらず、保護者、JA ながのの職員、長野市茂菅地区農家、大学教員が一体となって協働する生涯学習の場として機能するようになってきた。この生涯学習の視点をより一層実質化するために、「信大茂菅ふるさと農場」10年目からは、新しく不登校生やニートの親子と団塊世代の退職者の参加を呼びかけることにした。こうして「信大茂菅ふるさと農場」を舞台として展開される、子ども世代、青年世代、壮年世代、高齢者世代の生涯学習の場を「信大茂菅農業義塾」と命名することにした。

キーワード 信大茂菅農業義塾、不登校生、定年退職者

## 1. 本稿の目的

平成12年度（2000年度）にJA ながのと長野市茂菅地区農家、林部信造氏のご協力のもと、荒廃地を開墾して開設した「信大茂菅ふるさと農場」は、平成21年度（2009年度）に10年目の佳節を迎える。この

農場は、学生の主体的・意欲的な実践によって継承されている第15期「信大 YOU 遊世間」の活動の一環として実践され、授業科目「社会体験実習」に位置づけられている。この農場はまた、教職に関する科目「生活科指導法基礎」、「総合演習（米づくりと食育）」のかけがえのない教材園としても活用されている。

本稿の目的は第1に、「信大茂菅ふるさと農場」9年間の実践経過とそこにおける教育研究成果を明らかにすることである。第2は、学生主体で不登校生・ニートと定年退職者が協働する「信大茂菅農業義塾」の新たな「人づくり」戦略を具体化することである。

## 2. 「信大茂菅ふるさと農場」9年間の実践経過と教育研究成果

### 2.1. 荒廃地の開墾による「信大茂菅ふるさと農場」開設の直接的動機

筆者は農業には全くの素人であった。しかし、農作業に取り組むことは学生のためになる。どんなに苦勞があっても、十年一剣を磨く精神で学生と共に農作業に取り組もうと固く決心する直接的な動機となったのは、宮沢賢治の詩「稲作挿話」との出会いであった。1999年7月、岩手県盛岡市でNHK主催のシンポジウム「土から学ぶ子どもたちの未来」が開催された。パネラーの一人でシンガーソングライターのイルカさんが、シンポジウムの最後に盛岡高農出身の農業研究者、農村指導者である宮沢賢治の詩「稲作挿話」を朗読された。それは次のような一節であった。

「これからの本統の勉強はねえ  
テニスをしてながら商売の先生から  
義理で教はることでないんだ  
きみのやうにさ  
吹雪やわづかの仕事のひまで  
泣きながら

からだに刻んで行く勉強が  
 まもなくぐんぐん強い芽を噴いて  
 どこまでのびるかわからない  
 それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ」

筆者はこの詩を初めて聴いて、即座に小作人になろうと腹を決めた。それは地域社会から遊離し、大学キャンパスでイベントとして実践してきた第6期「信大YOU遊サタデー」の在り方を脱皮していく道は、荒廢地を開墾して農業に取り組む道であると心に深く期したのであった。学生と共に地域社会に出て、そこで子どもたち、保護者と「土づくり」に継続的にかかわることが「人づくり」への直道であると考えたのである。

## 2.2. 「信大茂菅ふるさと農場」への子どもの参加募集

「信大茂菅ふるさと農場」は、教育学部キャンパスから西へ約2キロメートル、鬼無里方面に向かう国道406号の茂菅大橋の下に位置する。徒歩で約20分、自転車で10分の距離にある。旭山の麓、裾花川沿いにあり、緑に囲まれた静寂な場所である。澄んだ空気と北アルプスから流れてくる清流に接していると自ずと癒やされるのを感じることができる。ここに6年間放棄され荒廢地と化していた水田4アールと畑3アールをJAながのから借り受け、平成12年（2000年）3月15日に開墾作業を終えて「信大茂菅ふるさと農場」と命名した。その後、平成18年（2006年）に畑3アールを拡張し、平成20年（2008年）10月には「信大茂菅農業義塾」の開設に備えて、3年間放棄置されていた隣接地の畑2アールを借り受けて開墾した。

この農場に主役となる子どもたちが来てくれなければ目標を実現することができない。子ども募集のために作成したチラシは次のようなものであった。

表1. 子ども募集案内

<p>農作業体験の子どもさん募集！ —信大のお兄さん・お姉さんといっしょに楽しもう—</p> <p>私たちは、信州大学教育学部に学ぶ学生です。私たちは田んぼや畑に入る機会の少なくなった現代の子どもたちといっしょに農作業に汗を流し、地域の方々と世代を超えた交流をする場をもちたいと考え、茂菅地区に水田と畑をお借りして3月から準備を進めてきました。農作業知識の乏しい私たちですが、このたびJAながの、JA長野県青年部協議会のご指導ご協力により、「信大茂菅ふるさと農場」を開設することになりました。この農場で私たち学生といっしょに農作業体験に汗を流してくださるお子さんを募集しますのでよろしくごお願い致します。</p> <p>(1) 活動の主旨</p> <ul style="list-style-type: none"><li>① 我が国では、子どもたちが農作業の手伝いをしている姿や田畑で遊んでいる姿が見られなくなって久しくなりました。私たちは、子どもたちどうし、また、お兄さん・お姉さんと子どもたちが、外での農作業体験を通してふれあっていく機会を作りたいと考えました。</li><li>② 大地に働きかける農作業に取り組み、自然の中で作物を育てることの苦労や喜びを実感したいと思いました。また、地道な「土づくり」の大切さを通して、「人づくり」に関わる教師としての力量形成に取り組みたいと考えました。</li></ul> <p>(2) 参加申込み</p> <ul style="list-style-type: none"><li>① 対象：幼稚園児、小学生、中学生</li><li>② 年会費：300円（郵送代）（平成20年度の会費は1,500円となっている。）</li></ul>
---

### 2.3. 「信大茂菅ふるさと農場」を地主から借り受けるためのJAながのとの連携

教育学部は農業者ではないので、地主さんから直接に農地を借り受けることができない。そこでJAながののご理解とご協力によって、JA（農協）を介して「信大茂菅ふるさと農場」を借り受けることができた。JAながのはこの農場を国際協力田として位置づけておられるので、4アールの水田から収穫される240kg～300kgのお米のうち、玄米で60kgを毎年JAながのに納め、アフリカのマリ共和国への国際援助米として活用されている。

平成12年度（2000年度）に教育学部からJAながのに依頼した文書の概要は、次ページの通りであった。

表2. JA（農協）への協力依頼文

JA 長野中央会総務企画部企画開発課長 殿  
 ながの農業協同組合代表理事組合長 殿

信州大学教育学部長  
藤沢謙一郎

「自然体験・社会体験実習について」（依頼）

拝啓 時下、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。  
 平素から、本学部の教育・研究につきましては、種々ご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、本学部総合・生活科教育分野では、自然体験・社会体験実習を取り入れた「総合的な学習の時間」の指導ができる力を身につけるために、田・畑・山林を活用した様々な農業体験を経験する場として、貴施設での自然体験・社会体験実習を計画しました。  
 つきましては、下記の通り実施したいのでよろしくお願い致します。 敬具

記

1. 参加学生 「社会体験実習」 約30名  
 「生活科指導法基礎」 約200名  
 「総合演習」 約20名

2. 実施場所 貴指定の圃場（「信大茂菅ふるさと農場」）

3. 問い合わせ先・連絡先 〒380-8544 長野市西長野6-ロ  
 信州大学教育学部  
 担当教員 土井 進  
 TEL/FAX 026-238-4260

#### 2.4. 学生農場長・副農場長と年度の特徴

この農場でこれまでの9年間に農作業体験に取り組んだ学生は、「社会体験実習」で204名、「生活科指導法基礎」で1,389名、「総合演習」で49名、合計1,642名となっている。「生活科指導法基礎」と「総合演習」の授業には、地域の子どもたちは参加していない。しかし、「社会体験実習」は金曜日の前期4限に位置づけられた授業科目ではあるが、授業時間内だけでは終わらない。「信大 YOU 遊世間」のプラザの一つとして、毎週水曜日の昼休みの全体会への出席と年間8回～10回の子どもたちとの体験活動を企画・運営することが課題となっている。このような重い負担があるにもかかわらず、毎年茂菅の農場長をやりたいと立候補してくれる学生が後を絶たない。実に不思議な

表3. 歴代学生農場長・副農場長名

	年 度	農場長・副農場長 (専攻学年)	特色ある活動
1	平成12年度	杉山 雅幸 (野外4年) 千野加世子 (生活3年)	荒廃地の開墾。畑作業のグループ制とオーナー制の比較考察
2	平成13年度	西澤 俊輔 (理数3年) 原山 美樹 (生活2年) 花村 尚美 (理数2年)	秋の田起こしが終わった水田に蓮華の種を播いた。春にきれいな花を咲かせた田んぼで子どもたちと草花遊びをした。
3	平成14年度	那須 紋子 (生活3年) 高橋 和之 (理数3年)	田植えの終わった水田に、佐久で購入したフナの稚魚4,500匹を放流、飼育
4	平成15年度	北川 伸尚 (障害児3年) 宇良 知子 (生活3年)	茂菅米で餅つき、茂菅で収穫した完全無農薬の新米でお寿司パーティー
5	平成16年度	神林 彩井 (生活3年) 吉澤あすか (言語3年)	冬におはぎ作り。水田の畦に植えた大豆を収穫し、きなこにすりつぶした。
6	平成17年度	松井 泉樹 (生活3年) 川端 智子 (教育3年) 矢竹喜美子 (理数3年)	ジャンボかぼちゃが2個大きく実った。第4回 YOU 遊フェスティバルの会場入り口に入場門として置いた
7	平成18年度	平林 照世 (言語3年) 川辺 裕作 (教育3年)	五穀豊稔といわれるが、五穀を実際に栽培したいと考えて米、麦、豆、粟、黍を栽培した。落花生の栽培。
8	平成19年度	洞出 直美 (教育3年) 上田 雄介 (理数3年)	背中に「八代目茂菅組」と書かれた橙色のつなぎを着て作業した。
9	平成20年度	宮川はるな (言語3年) 中川 茜 (生活3年) 原 卓也 (理数3年)	田植えの終わった水田にザリガニを20匹放流し、子どもたちにザリガニつりをさせた。

ことであり、大変ありがたいことである。茂菅地域に住まれ常に学生を励まし育てて下さっている林部信造氏ご夫妻のお人柄とJAながのご協力、そして、参加してくれる子どもと保護者のおかげであると心から感謝している。

これまでに農場長・副農場長をつとめた学生とその年度の特色ある活動は上の表の通りである。

## 2.5. 「信大茂菅ふるさと農場」9年間の教育研究成果

この農場での教育・研究成果が顕著になってくるのは10年が過ぎてからであると考えてきた。それは、農場における自然体験や社会体験が人間形成の上で成果となって表れるようになるには、最低10年間は

かかると思われたからである。したがって、JAながのの営農指導員、北村典子氏に案内されて、平成11年（1999年）に林部信造氏を初めてお訪ねしたとき、「いい先生」を育てるために、そして、地域社会の子どもたちの成長の場とするために、10年間は石にかじりついてでも頑張りたいので、何としてもご協力をお願いしたいと懇願したのであった。当時70歳でいらっしゃった林部さんは笑みを浮かべて筆者の微意を了とされ、協力を惜しまないとまで仰ってくださった。

これからが「信大茂菅農業義塾」における本格的な教育研究の始まりであると考えている。その基盤となるこれまでの教育研究成果を列記すると以下のとおりである。

- ① 土井進「信大茂菅ふるさと農場」と「信大牟礼ふるさと農場」の創設—「生活科」と「総合的な学習の時間」の研究開発をめざして—、『平成12年度信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』 pp.211-215、2001年3月
- ② 海沼正典・土井進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義—「信大茂菅ふるさと農場」での実践を通して—」、信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』 No.2 pp.123-132、2001年7月
- ③ 杉山雅幸「土から人へ—小・中学校における農作業体験活動の実態と課題—」、『第1期「信大 YOU 遊広場」の実践—“臨床の知”を求めて—』 pp.181-186 信州大学教育学部、2002年3月
- ④ 相磯素子「信大茂菅ふるさと農場」における自然体験が子どもの人間形成に及ぼした影響」、同上 pp.175-180
- ⑤ 西澤俊輔「人間関係、そして「信大 YOU 遊広場」—出会うことができた人から学んだこと—」、同上 pp.127-132
- ⑥ 志村昌之・土井進「農作業における子どもの「体験」と「学

- び」を結ぶ支援—「信大 YOU 遊プラザ」に見る学生の実践—」、  
信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研  
究』No.3 pp.97-106、2002年7月
- ⑦ 鹿子木愛「農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力—  
「信大茂菅ふるさと農場」の実践分析—」、『第2期「信大 YOU  
遊広場」の実践—“臨床の知”を求めて—』pp.198-202 信州  
大学教育学部、2003年3月
- ⑧ 那須紋子「教材としての農業」、同上 pp.143-147
- ⑨ 高橋和之「農業体験から学んだこと—子どもたちとのコミュニ  
ケーション—」、同上 pp.138-142
- ⑩ 土井進「土づくり」による「人づくり」『HOT LINER』  
pp.4-8、58巻3号、学習研究社、2003年5月
- ⑪ 土井進「学生が生活科の目標の核心にふれる大学での体験的  
授業をめざして」『信州の生活科実践誌 ふるさとの大地』、  
pp.6-7、信濃教育会、2004年1月
- ⑫ 北川伸尚「素敵な自分になるために—茂菅ふるさと農場での思  
いから—」、『信州大学における「地域貢献」の教員養成—第1  
期「信大 YOU 遊世間」の実践—』pp.211-214 信州大学教育  
学部、2004年1月
- ⑬ 土井進「信大茂菅ふるさと農場」における「生活科指導法基  
礎」の授業実践、『平成15年度信州大学教育学部 学部・附属  
共同研究報告書』pp.144-146、2004年3月
- ⑭ 土井進「環境教育としての総合演習—「信大茂菅ふるさと農  
場」における「米づくりと人作り」の実践—」、佐島群巳・  
高山博之・山下宏文編『エネルギー環境教育の理論と実践』  
pp.19-26 国土社、2005年1月
- ⑮ 白井克典「教育学部学生と地域の高齢者との継続的な交流体験



活動の実践—「信大茂菅ふるさと農場」における学生と高齢者との協働によるカリキュラム開発—、信州大学大学院教育学研究科修士論文「学校教育における世代間交流に求められる教師の力量—地域の高齢者との継続的な交流体験活動の推進—」  
第3章 2005年1月

- ⑩ 神林彩井「信大茂菅ふるさと農場」『信州大学における地域貢献の教員養成—「信大 YOU 遊世間」の実践—（第11集）』 pp.14-18、信州大学教育学部、2005年3月
- ⑪ 土井進「体験力を育てる農業学習—「信大茂菅ふるさと農場」における実践—」、『教育展望』第51巻第7号、pp.24-33、教育調査研究所、2005年7月
- ⑫ 松井泉樹「世代を超えた人と人をつなぐ自然の力」『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究（第12集）』 pp.19-25、信州大学教育学部、2006年3月
- ⑬ 平林照世「「ありがとう」自然の恵みに、共に汗する仲間に」『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究（第13集）』 pp.39-47、信州大学教育学部、2007年3月
- ⑭ 土井進「剝離しない学力と体験力」「信州大学の地域貢献活動」、茅野敏英編著『考える力を高める体験学習』、pp.24-30、pp.128-135、玉川大学出版部、2007年5月
- ⑮ 土井進「信州大学学生による地域貢献活動とその評価—14年間にわたる「信大 YOU 遊世間」の事例研究—」、『地域ブランド研究』第3号、pp.109-129、信州大学人文学部、2007年12月
- ⑯ 洞出直美「実践から得た“臨床の知” 八代目「信大茂菅ふるさと農場」」『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究（第14集）』 pp.14-18、信州大学教育学部、2008年3月
- ⑰ 土井進「生活科指導法基礎」の授業づくりにおける「信大茂菅

ふるさと農場」の意義(1)、pp.15-26、信州大学教育学部紀要第120号、2008年3月

### 3. 「信大茂菅農業義塾」の開設による新たな「人づくり」戦略

#### 3.1. 不登校生・ニートと協働する「土づくり」

上述のようなこれまでの9年間にわたる教育研究成果を踏まえ、10年目からは更なる地域貢献の活動に取り組みたいと考えた。学生が主体者となり、鍬と鎌を道具として活用し、地域の子ども・保護者と農作業を通して自然体験・社会体験を共有することを根本哲学として実践しているのが「信大茂菅ふるさと農場」である。地域貢献の道において我々教育学部関係者が最も得意とする分野が「人づくり」である。人間形成の途上において、いじめや不登校、そして、不就学、不就労(ニート)等の大きな苦難に直面している青少年に対して、人間性を回復する癒しの場を提供することである。大地自然に交わる「土づくり」の営みには、人間の心を浄化する「人づくり」の働きが込められている。身土不二という言葉が端的に示しているように、人間生活と自然環境は一体不離であり、相互に密接に関連し合っている。

この視点にたって今日の我が国の教育界の問題点と農業の問題点を凝視するとき、筆者には両者の間に通底しているものがあると思われる。それは、全国の小中学生のうち30日以上登校していない、いわゆる不登校児童生徒数はこの10年間、毎年13万人を下ることがないのである。学校にカウンセラーが配置されたり、中間教室が設置されたりしても一向に減ることがなく14万人に近づこうとしている。長野県でも不登校生が毎年2,000名以上にのぼると報告されている。この不登校児童生徒は中学卒業後、高校進学や就職する者もあるが、多くはそのまま家庭内に引きこもり不就学、不就労となる場合が多い。このようないわゆるニートと呼ばれる青年は、全国で50万人～100万

とも報告されている。このことが今日の我が国の教育の最大の問題点であると筆者は考える。このような不登校やニートの問題で一番苦しんでいるのは、子どもたち自身であり、ニートの青年自身である。そして、その子どもたちや青年と共に苦しみ、じっと耐えて、励まし続けている母親や保護者である。筆者は今日の我が国の教育を見つめたとき、一番の問題点はここにあると考えている。

一方、目を国土に転ずるとき、昭和40年代（1965年）の高度経済成長期以後の農業政策によって、遊休農地や荒廃地は年々増加し、今日では全国で約100万ヘクタールにも達していると報告されている。このような広大な農地が放棄され、我が国の食糧自給率は39%にまで低下している。目の前に耕作地があるのを見ながら、見て見ぬふりをするかのように農地を放棄している。このような大地自然に対する人間の在り方自体が人間生活のうえにも大きく影響してきているのであると捉えることは、決して見当違いではあるまい。

まさに身土不二である。我が国の農学博士第1号となった新渡戸稲造は『農業本論』において、「天地偽らず。農は天地に交わること近し。故に農は偽らず」と述べている。国土自然を荒らしたままにしておいて、人間性だけは豊かでありたいと願ってみても、それは叶わないこととあってよい。

不登校の問題やニートの問題は一筋縄ではとても解決は難しい。しかしながら、まず第一歩を大地に踏み入れ、額に汗して田畑を耕し、苗を植え、草を取り、天地の恵みを収穫する喜びを味わい、感謝の念をもって食べるという体験をするならば、不登校やニートで悩んでいる青少年も必ずや人間性を回復し、「生きる力」を蘇生していくに違いないと考えられるのである。

### 3.2. 定年退職者の生涯学習の場としての「信大茂菅農業義塾」

これまでの9年間に「信大茂菅ふるさと農場」の活動に、農業研修を目的として定年退職者が参加するということはなかった。そもそも「信大茂菅ふるさと農場」の参加者募集要項には、「幼児・小学生・中学生」とあり、定年退職者はおろか保護者も視野には入っていなかった。この農場はあくまでも学生が子どもとふれあいながら農作業体験を学ぶ教員養成の場として設定されたものである、このような考え方で農場経営をするだけで精一杯であったというのが実情であった。もちろん平成12年度（2000年度）にこの農場を始めた時から、保護者には必要に応じて加勢をお願いしてきたが、実際に裸足になって泥の田んぼに入って下さる保護者は少なかった。最近になってようやく保護者もただ見学しているだけでなく、一緒に農作業に参加することが常態となってきた。これによって子ども、親、学生、JA職員、茂菅地区農家、大学教員が一つの輪になり、交流し、協働で仕事を成し遂げる喜びと充実感を共有することができるようになった。このことは9年間の地道な実践がもたらしてくれた人間形成上の大きな成果であると捉えている。

茂菅では農作業を始める前に毎回、学生が準備運動として「茂菅体操」を指導する。これには農場に集った全員が参加する。体操の後に行うアイスブレイクにも全員が参加し、約60名が手に手をつないで大きな一つの輪になって回って踊る。こうして一つの輪になってお互いを見渡してみると、そこには子ども世代、青年世代、壮年・中年世代、そして、高齢者世代の全ての世代の人が含まれていることが誰の目にもはっきりとわかる。この農場は子どもと学生（青年）だけの学びの場ではなく、広く生涯学習の場となって機能していることが見えてきたのである。

教員養成という視野だけでなく、生涯学習という視点に眼が開かれ

たときに脳裏に浮かんできたことは、「人づくり」のための「土づくり」という哲学を、少子高齢社会の問題解決の手法として活用することであった。今、大量の団塊の世代が定年退職期を迎えている。退職した人たちは、1年くらいは仕事を離れてゆっくりとしたいと考えるであろう。しかし、その期間が過ぎると地域社会の中でこれまでに築き上げてきたキャリアを生かして、何か貢献できる道はないかとボランティア活動を模索したり、新たな生きがいと生活の糧を求める活動を求めることになるに違いない。このような高齢者のニーズに応えることを目的として開設するのが「信大茂菅農業義塾」である。

平成20年（2008年）に設置された長野県生涯学習審議会においては、「人や地域とかがわって学び、学びの成果を人や地域に生かす生涯学習の推進」方策が検討されている。「信大茂菅農業義塾」はまさしくこの生涯学習推進方策の一つの実践事例となることであろう。

### 3.3. 青少年のためのキャリア教育と定年退職者のための生きがいを両立する場

我が国では少子高齢社会が急速に進行している。青少年にとっては変化の激しい時代を逞しく生きていく力を身につけることが課題である。一方、定年退職者にとってはこれまでのキャリアを活かして、青少年の育成に貢献することは喜びとなるであろう。また、健康志向から自家菜園を持ちたいと望む人も少なくないであろう。ここに「遊び」と「学び」の世代である青少年と、「遊び」と「教え」の世代である高齢者を「信大茂菅ふるさと農場」において結ぶ意義がある。

定年退職者の安全・安心の農業志向のニーズを的確に捉え、長野市農業公社と連携して遊休農地の有効活用を図りたい。また、不登校生とニートの人たちには、緑の木々に覆われた旭山のふもとに裾花川が流れる静かな田園地帯に位置する「信大茂菅ふるさと農場」で、大い

に鋭気を養い、癒しを満喫していただきたいと願う。

### 3.4. 「信大茂菅農業義塾」の概念図

これまでに述べてきたことを図示すると下の図のようになる。

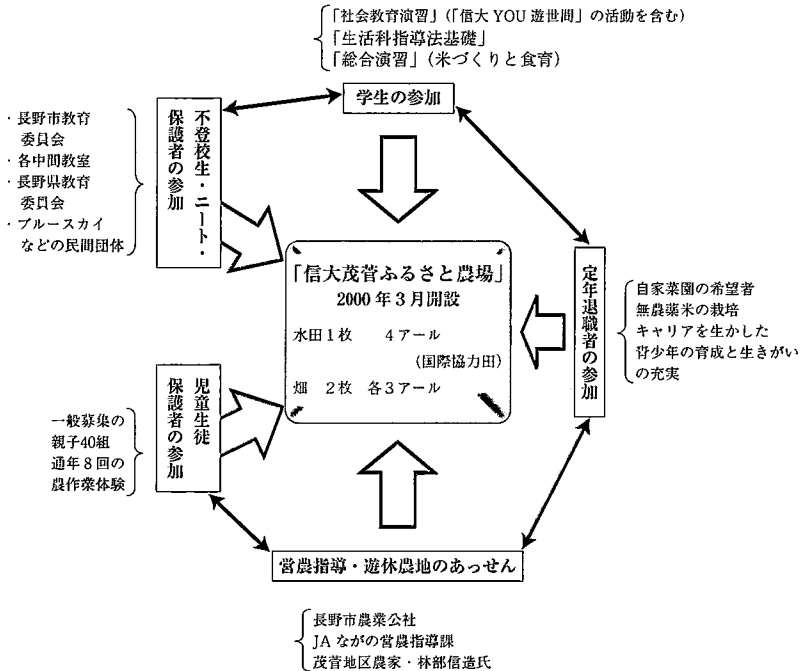


図1. 「信大茂菅農業義塾」の概念図

## 4. 「信大茂菅農業義塾」開設までの実践

まず第1は、長野県教育委員会教学指導課生徒指導係と連携し、「信大茂菅農業義塾」を中間教室と同じ機能をもつ教育機関として位置付けてもらうことである。この農業義塾に参加し、農作業による自然体験や様々な人々とふれあう社会体験をした日数を、登校日として認知してもらうことである。長野県教育委員会によるこのような理解

と支援があることによって、児童生徒はもちろん保護者も「信大茂菅農業義塾」に出向く大きな動機付けとなる。ここも中間教室と同じ存在としてとらえてもらうことができるようになる。

第2に、長野市教育委員会義務教育課と連携し、市が管轄する城山中間教室、松代中間教室を始めとする8つの中間教室に「信大茂菅農業義塾」の案内状を配布することである。中間教室までなら登校することができる児童生徒に、新たに「信大茂菅農業義塾」という農業体験の活動拠点を提供するのである。

第3に、中間教室までも登校できずに家庭に引きこもっている児童生徒には、長野市校長会と連携して「信大茂菅農業義塾」の趣旨を説明し、ご理解を得て各家庭に農業義塾の案内状を配付することである。そして、学校教育の場とは違う農場という青空教室において、定年退職者という人生経験豊富な人たちによるキャリア教育の機会が望めること、学生の献身的な関わりが期待できること、そして、何よりも「土づくり」に取り組むことによって、大地から癒やされること、稲やじゃがいも、さつまいも、とうもろこし、大豆、大根、ほうれん草、トマト、なす、にんじん、玉葱、こんにゃくなどの農作物の栽培活動によって癒やされ、元気を回復することができるというメッセージを発信したい。

第4に、長野市農業公社と連携し、定年退職者が1年間「信大茂菅農業義塾」で研修したあとに遊休農地を自家菜園や無農薬水田として貸し出しを受けることができるようにする。これまで農業には全く無縁であった人たちも、「信大茂菅ふるさと農場」で1年間にわたって、JAながの営農指導課の指導員や地元長野市茂菅地区農家、林部信造氏の指導のもとに青少年といっしょに農作業体験に取り組むことによって、次年度からの自立への自信を深めることをめざす。また、長野市農業公社やJAながのを通して、定年退職後に農業に従事してみた

いと考えている方々に「信大茂菅農業義塾」のことを紹介して頂き、農業だけでなく青少年との関わりを通してキャリア教育へも参画することができることが特色であることをアピールする。

さらに、ハローワークにも「信大茂菅農業義塾」の案内状を置かせて頂き、就職活動への第一歩としていただけるようにしたい。

## 5. まとめ

「信大茂菅ふるさと農場」10年目を佳節として開校する「信大茂菅農業義塾」がめざす研究課題は次の2つである。

- ① 不登校生が、学生や定年退職者とふれあいながら「土づくり」に取り組むことによって、どのような成長を遂げることができるかを実証的に明らかにすることである。
- ② 定年退職者が、学生や児童生徒とふれあいながら「土づくり」に取り組むことによって、どのような学びや生きがいを得ることができるかを実証的に明らかにすることである。

### 【謝辞】

英文要旨の作成にあたっては、教育学部国際交流室の北澤勝親講師、並びに言語教育講座のマーク・レベッカ・アン講師にご指導をいただいた。

ここに記して感謝の意を表します。

(受稿日 2008.10.31 掲載決定日 2008.11.1)

(どい・すすむ／信州大学教育学部)



## A 10th-year Report on Character-building Activities at Shinshu University's Mosuge Home Farm

—The Establishment of Shinshu University's Mosuge Farm School—

Susumu Doi

### **【Abstract】**

Shinshu University's Mosuge Home Farm opened in 2000 (Heisei 12) to improve student's interaction with children on a regular basis throughout the year. Therefore it effectively eliminated the entertainment aspect of Shinshu University's "You-Yu Saturday project" established in 1994 (Heisei 6).

The first objective of this farm is to establish a foundation for developing students' practical leadership ability, including communicative competence, project-making skills, and other qualities requisite for school teachers, by having them do farm work with children.

This farm now functions as a place for life-long study (continuing education) in collaboration with JA (Japan Agriculture) in Nagano, farmers in Mosuge in Nagano City., children's parents and university professors.

We have also begun to invite students who cannot attend school due to psychological problems, as well as NEETs, along with their parents and retired "baby boomers". We therefore call this school "Shinshu University's Mosuge Farm School", a place where all generations can learn together.

**Keywords and phrases** Shinshu University's Mosuge Farm School, Students who cannot attend school due to psychological problems, Retired "baby boomers"